

人生最大のケンカ

福井県立武生商業高等学校

永谷 和恵

私には二つ年が離れたお姉ちゃんがいる。昔から仲が悪く、一日に必ず二回はケンカをするほどだった。泣き虫だったお姉ちゃんはいつも先に泣くので、毎回私が怒られていた。「なんでお姉ちゃんは頭を撫でてもらえて、私は怒られるの」といつも心の中で思っていた。だから小さい頃の私は、お姉ちゃんのことを大嫌いだった。

そして私が小学校一年生になったばかりのある春の日に、人生最大のケンカをした。その日はおばあちゃんが買ってくれた勉強机が家に届いた日だった。その机には真っ赤なリボンが結ばれていて、当時赤が大好きだった私は、うれしくてたまらなかった。そしてお姉ちゃんが学校から帰ると、やっぱりリボンの取り合いが始まり、いつも通りお姉ちゃんが先に泣いて、いつも通り「半分切ってあげなさい。」と私が怒られたが、このリボンだけは絶対に譲りたくなくて、そっぽを向いて部屋へ戻った。しばらくすると、リビングから「わーい。」という声が出て、「ああ、お姉ちゃんにリボンあげたんやなあ。」って思っ、いつもならここで私がリビングに飛び出してい、ケンカを再開するのだがこの日は違った。なぜかあの日は怒るというよりも、ものすごく悲しいと思ったのだ。その時の私は、お母さんはお姉ちゃんの方が好きだからいつも私のことばかり怒って、お姉ちゃんはその嫌いだからいつも私のものをとろうとするんだ、と考えたのだ。今までのケンカを全て重ねて、幼い私はそう結論を出した。

その時、初めてお姉ちゃんとのケンカで泣きそうになった。だんだん目の前がぼやけてきて、でも絶対に泣きたくなくて、泣いている姿を見られたくなくて、私は近くにあったランドセルを持って走って家を出た。小学校一年生が思いつく場所なんて限られていて、家から歩いて十分もないところにある公園にきた。いつもは、同じ年ぐらいの子たちが数人いるのに、この日は誰もいなくて、お気に入りの黄色のブランコも、この日だけは全然楽しくなかった。いつもはカラフルでいきいきしている他の遊具も、全部灰色に見えた。まるで私の心の中を表しているようだった。何も考えずにただただ座り込んで泣いていた。しばらくして、夕日も沈んで暗くなりかけた頃に、家の方向から私の名前を呼ぶお母さんの声があったが、その声には心えず慌てて涙をふいた。公園で一人でブランコに座っている私を見つけ、

「何してるの！一人でどこでも行っちゃだめでしょ！」

そう言ったお母さんの声はすぐ怒っていた。静かに顔をあげると、いつも私を怒るときのお母さんの顔じゃなくて、目は潤んでいて、息があがっていた。隣には泣きそうな顔のお姉ちゃんがいる、二人の顔を見た瞬間、必死に我慢していた涙を抑えることができなくなった。泣きじやくる私を撫でてくれたお母さんの手は温かくて余計に涙があふれてきた。その時、お姉ちゃんが、

「ごめん。」

と言ってずっと握りしめていたからであろうくしゃくしゃになった真っ赤なリボンを渡してきた。そして私も小さい声で、

「ごめん。」

と言った。多分この時が私たちの初めての仲直りだと思う。三人で笑いながら家まで歩いて帰った。公園を出るときに見た遊具は、いつものカラフルな遊具に戻っていた。

あれから十年が経ち、お姉ちゃんは成人し、私は高校三年生になり、来年から大学生になる。あの日以来、私たちは変わらず毎日ケンカをしているが、毎回仲直りをしている。ついこの間、リボンの取り合いをした日のことをお母さんと話していた。そして私を探しに行くときに、暗い所が大の苦手なお姉ちゃんが、一緒に行くと言って聞かなかったということを知った。四歳のときに家族で行った北海道旅行でも、すぐどこにでも行く私のことを心配してお姉ちゃんがずっと付いてきてくれたけど、結局二人で迷子になったことも知った。どんなに小さかったときでもいつでもお姉ちゃんは私のお姉ちゃん、私の一番の理解者だ。心配性で誰よりも優しい心を持っているお姉ちゃんが今では大好きだ。いや、多分小さい頃からずっと大好きだったんだろう。